



關性爺明朝太平記

四

特

遠13

373

4



神速 18  
號 375  
卷 4

玉姓部の朝太平記

作者其蹟

四之巻 目錄



婿禮の  
孟廻の  
乳子  
其好

此の  
介添  
日奉  
行  
釋  
女

舞  
舞の  
座  
浦  
立  
舞  
の  
舞  
入  
一  
分

從  
文  
江  
杜  
若  
と  
花  
草  
浦

似  
下  
や  
〜  
舞  
入  
跡

矣見分るる又茶蓬文の九心山

世居ふいふ人てみ三味線乃調子

小舅が悪只七中とも耳輝の恨

百人乃あはとも知人乃通力自立

警死つきよ知事言清か屋

居居備行礎ハ助の曾古行公根

頭掛の仰りよ心の中ハ石門竜

西ノ千里こつて来る虎乃路ハ

婚礼ハ益廻り氣を女乃心

小房ハ賊徒國姓を武勇よあつて悪賊ハ海を平次

信り永曆皇帝を奉養ハ初は皇女ありしものぬ帝のまこ

侍幼稚なれハ周公且の隘を奪く延平王幼きハ輔弼として

万機の政を盡しよりの少く威方人ハよを被つとつとも功

ほろび礼儀と礼せハ人皆を徳を愛し一景とこの事あり

これいふハ乃周親王の方一里の用なれハとあつて内裏

造営あつて殿をそと文をとり十二の門をそとられハ車馬

門前又立居るあつて出入男をそとめ質客をそとらんあつ

て揖讓礼とけしああり万代光輝と唱ハ美奉として七妻ハあ

このま心通よあつてつた序代ありまのある海帝をそとめ



















つぎきつとよしうつく。ふ青きと三郎れ若れはお國のつこ  
身ま選せんくものあり金かね短たん平へいとる勇ゆう力りきとあそも書かき討うちつこしよいとて  
似にを隠かくとよありとび馬うま行ゆありつらとどと所ところへとを強つよく籠かごり  
と美うつく賊ぞくく大明たいめいれ時代じだいとさぬる大功たいこう座ざをい勿な備べい目めかまき  
方かたあぐせんやう功名こうめいさくもの言ことばと事ことをわらさそく。あつたの國  
姓せい名な西せい又また望ぼう空くうでぬる討うちの妻さい賊ぞくの強つよ意いさあがりて。おもや孫ひこ  
殺ころつとまへ。そのれの家いへをむしとさくせんやう孫ひこさくあ  
むくれとく忠ちゆう勤きんとをげまされ。あぐ大明たいめいを平へいれ奉ほうるさく  
それにお虎こお殺ころす死しする討うち一ひと統とさるあよのつとくを備べいとよ  
まことあり。今いまあぐせんやと紙かみとにお虎こさる。私わたくしれを恨うらむとて命いのち  
を殺ころす。せんやとんの紙かみを毛け一ひと統とさるつあよ。まこと大明たいめいと

くつんとせいさく二人ふたりまへやひよあそも中なかつく強つよく  
事こと推おしまあぐつりまへ。げねをかへん強つよるさくせんやう相あいま  
あつて討うちつとあおらとど。せそつこせんやうあらあそれ  
家いへをま退ひきりかくと腹はら痛いた者とあつた君きみれを西せい家けれ為なる。なと  
よとそととあり右みぎのぬむお我わがいらと推おしませま。あぐせんやと  
修しゆくせるとあ人ひと黄わうとあり君きみを獨ひとり侍さむらいしまり。政せい乃のを向むかへて  
行ゆ大明たいめい長ながく勢せい強つよよあつたあつた。よむし入いれて身み其その想さうふ三種さんしゆ  
とまをまり。あぐせんや指さしえさくおひいり。まを。世よの申まを乃の表ひら  
裏うらのの新あらた曲まがれ傷やぶ居いとふとまへつ。まを。世よの申まを乃の表ひら  
肩かたおつ。まを。方かたとそと直ただちる。世よの申まを乃の表ひらの申まを乃の表ひらの男おとこあり  
号ごう三種さんしゆ。まを。後ごまへ。まを。情じやう抱ほうま。まを。て。九く他た山さんれ洞どう穴けつ。まを。

美極の宴食として十余の此美林の向のめと好むかすむか  
 此書五月十日血噴軍の致まきん天方料理と申身きて集  
 らるるりのちておいて西君れは候しぬるりと顔ゆしてと  
 くよまるとんを攻むきと斬つてとひりくつあま荒の美  
 命とそがが好ひまら。今ひめてこの時代よあせり吉ひ集  
 の働とと自林他れ言る氣益とあつてあつてあつてあつて  
 一統の時代とるふあつてと百余年いさつと初りとも大款  
 此舞用せし。まゝあつてと大さよちらひ。官福たよ事ありと  
 人よあつて肉らよむひんよあつてせんやと世よあつて我  
 此のれち坊の信もかえれ。若位言極れまにせしめんと若  
 らとと美といまはう秋はらん。びあせんやと世果れ人よとあつて

かのよちる四れあよ方と選と世よめゆたせ。異二種へあつて  
 團姓あつて不美者と奉く世人のつりあつて延年よあつてつる感  
 此翼びいしけ君信たよとと出我と編塞とるらん。を附とあつて  
 ことんたの信あつてのめつとあ。ぬれもと事と成さひとあぬさひと  
 ぞと初めせんともや振さひ巧事うら入事よのせしきとあつて  
 よ古ちかあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まで異二種めとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 わとくともあつて信りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 かまへく初とつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 其初とつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 牙つてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

と尋ねしつゝして未だしんたふまよき信ふ道なるをと白  
あつてしゆらまきたる。天性こゝぬくせんや聖物あめく交りて  
手紙の虎よ打のつと信をこつとせと一人其種が徳を為し  
とあるふあゆと廻りくがづくまよとと居たれどもやん  
まかまおひらぐれおられた無他府の九地と多きんんと  
虎よまごうりあらのはる深山鳥れまきびくく徳木まきりて  
日影をんま松の末蒼れ露石定あふかめく虎よ是をま  
ごり頂をのびてまれつら乃岩窟わりのまよ耳とあてまよ  
人喜せぬ相をもとあうまよと虎のりまきり一前なる大虎とて  
ありそつ。中まおれい其種包物と座せり牙よまの場乃を  
とまよひ發いなるけく虫株屋とこひ船中まき親色まきりて

刑渡り。くせんやなるこひきりくいふ命があつて去約回  
おい去れ中(まごり)身と入あまきりてかたれぬぬらそそ  
あがり地の下とごりてく下界よとぬいまの事は世界乃中よ  
おる者いひはは娘をたのむおとせぬらぬらりいし事わりもせ  
ふことえんまのしりし。そそ白状とまきりておしりまきりて  
されいふまの撮の下れ舞をれい其輝り方(後)見ん。まあ  
とまよとれい其種あつてまよひ。こつらや其種希まよかそり  
やまぬまの礼せよ武勇とぬく徳めを平れせよまよとまよ  
治るといひくかく静澄なるはせよま力をまきりておしり  
我の妻女柳音若り又よかろく果るまよびんよあひ。お子を  
代はまよのせきりぬらぬらまきりて徳まきりて徳まきりて

張良のむらとさうくいふよまのけ入勢よらききあり書が後  
 世とせのんと肉なきひのるおせんん皇女を弑す書は下  
 うるごとのみとのり初まぬれ婿ありて意よまのり入るる交  
 成遠背りせが身とそくおろしらの宣言とそひくのたね雨  
 詮乞と知難乃門出とまろく家とゆ人とあまひく一や難病の  
 つまゆらとそくまの婿もゆめをと係書とらうらとそくやと書入  
 けの車入とそくゆい皇女と婿婿の書くとる道徳のひきまの  
 ごととそれゆいおねのけむくはひののりひにうらとそく先  
 祖の皇帝と書田劉伯温よあひまの。大元各神の仙術を傳  
 傳對の修のといまうら仙の妙とゆ露盤乃るも書あ處  
 と級也仙して世の仲れ吾恩感と表書とらうらとそく。そんな

とも方只今書よまぬれハ信居れ新傳と其輝の二といひの左  
 一達よ美とのとあみとそく後よ美見ととらうらとそくけ我とらうて金  
 祇せんとの書とそくおまろが。毛の留新曲乃信居の所とそくかん  
 とけ仲と石使よせんあけあうらとそく。集う家とそくひとといひ  
 けおと我手後よ仙つらうらとそく書よ信ととそくとそくあまひとそく  
 と桂うらとそくかりとそくお居入方とそくとら信計と。このうらとそく  
 書居せけんうらとそくお居の書。大元お居のうらとそくかりとそく  
 ありとそく書と書とそくまらとそく。今日あくと平書とそくあつとそくハ  
 とやく下中一書ひてゆのゆとのり。お居書かありとそく。其書  
 見付とそく書とそくまらとそくお居の書。ひとそくひとそくあつとそく  
 のとそく。自書れとそくあつとそくのりか。他書ありとそく。其書とそくひとそく







平戸に海原に民を養ふとありて後主と大明の奉を補佐し  
舞と処多し封しらす是と國姓爺とて威名を海に著く  
又老て官を福州の素よりありて徳后とて樂をせせりんと  
至孝のこくせんや新よ座ぬと建させたる老て官の徳はせり國  
姓爺のこく親よまろし世に稱あり子を稱し史をいれ入るはの  
て兼たの財よあり事と善徳徳毎日也。他事の好ぬは  
は指通してのりや少く執使して石門院の徳をかせり  
つ官を新面し相もはる玉姓爺せんて女と善をせり一最  
は指通あつて書女よ下はる是三徳と稱し善徳はせんて全  
よありて善けの國の善よ方延ひする三徳を討教しせんて女  
とかのが善とてまろしとていめんとははるの徳の虎の山に

任通よわむれありて民を國を治めり。三徳をつけ稱しは  
善徳よ下はるよ六兄弟あり。まのまを善めしてたりん  
企の形善徳の形跡具は善ま善と稱し善徳善徳は善三  
徳と称し善徳と善徳の善三徳の善三徳の善三徳の善三徳  
ありて善三徳の刑よありととも大明再興の武功  
とありて死飛流飛を討教ありて國姓爺の愛徳  
と傳し善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳  
難徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳  
ありて善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳  
宣旨あり。物老くせんや武勇ありてありて善徳の善徳の善徳の善徳  
利者方一徳徳の善をせり。下れ徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳の善徳

質としてより方子位わかしの戸せとの執儀しやくぎなりと執儀しやくぎと云くよ  
それ考かう一官いちくわんつるも支し均ぐんと云いりやうある科か人にんありて何なに身み  
あ難あぢきまるくと毎まい之これ存ぞんるれい石門せきもん執儀しやくぎと云くせんか  
よとせまあひよりひとさつらと金前かねぜん事ことありてやうやう  
執儀しやくぎとあはどりやうやうに似にてか一ひと子これにせんや執しやく儀ぎと云く  
つとよふ事こともあつて相あひま見みあつたる何なにあはせよあり執しやく儀ぎに  
おせりとも知しせん二ふた官くわんが家け来らい尹いん子し奇き宗そう一ひと官くわん老らう義ぎの  
はる耳みみ志しの執しやく儀ぎは所ところ女にょ若じやく我がの志しも七しち何なに事ことも支し均ぐんと云く  
あつたる姓せい又また能なが飛とびの所ところ耳みみと云くと耳みみへ入いりまはる仕しはれは何なに事こと  
ら得とれぬと執しやく儀ぎと云く下くだまれりやうけりやうと云く  
一ひと人にんの石いし門もん執しやく儀ぎと云く如ごとく執しやく儀ぎありていざんか飛とびよおとる事ことあり

を科かの流りゆう中ちゆうと申まを付つけはらむと云く刑けいよおとる事ことありけり  
石門せきもん執しやく儀ぎの耳みみれはよはと云く如ごとく執しやく儀ぎありていざんか飛とびよおとる事ことあり  
支し均ぐんと云くとありてやうやうに似にてか一ひと子これにせんや執しやく儀ぎと云く  
あつたる姓せい又また能なが飛とびの所ところ耳みみと云くと耳みみへ入いりまはる仕しはれは何なに事こと  
ら得とれぬと執しやく儀ぎと云く下くだまれりやうけりやうと云く  
一ひと人にんの石いし門もん執しやく儀ぎと云く如ごとく執しやく儀ぎありていざんか飛とびよおとる事ことあり



牛、ろ、三、種、が、他、世、又、と、い、ひ、尹、子、着、と、ま、の、こ、り、の、世、あ、り、の、  
世、あ、り、の、か、う、の、く、せ、ん、や、う、の、身、は、林、有、め、の、繩、ひ、く、は、  
方、の、年、應、一、か、の、世、を、飛、よ、お、こ、ま、あ、ど、と、い、ひ、の、下、る、林、有、と、  
引、起、し、引、起、し、り、尹、子、着、の、繩、を、と、せ、紐、ぬ、さ、と、ま、め、一、官、ハ、  
は、ら、り、の、世、を、ひ、か、り、石、の、地、い、り、と、ま、一、物、は、ま、む、り、を、  
と、紐、と、ま、む、ひ、ら、り、れ、ひ、強、は、ら、天、子、は、む、り、と、紐、と、ま、む、と、  
朝、教、同、の、あ、り、と、ま、む、世、を、捕、く、強、強、と、ま、む、一、入、り、と、ま、む、と、  
下、知、し、り、の、世、を、紐、解、ち、り、と、ま、む、考、官、は、お、く、か、り、お、く、と、  
考、官、遺、道、の、尾、跡、人、ま、ま、の、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、  
る、い、の、世、を、應、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、  
人、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、

出、ま、り、附、き、平、春、房、と、い、ひ、石、の、地、を、お、く、の、か、り、  
か、ら、ら、り、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、  
乃、遺、道、の、尾、跡、人、ま、ま、の、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、  
竹、の、世、を、應、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、  
う、た、れ、あ、り、の、世、を、考、官、二、人、と、ま、む、と、ま、む、と、  
と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、ま、む、と、  
血、身、の、世、を、下、さ、り、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、  
あ、り、あ、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、  
毛、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、  
と、虎、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、  
る、く、け、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、ひ、ら、り、の、世、を、

國を収めんとせんや。又虎をよめてのわらむと云ふ。さうせん  
かまひあつぬと云ふ。わらむと云ふ。あつぬと云ふ。あつぬと云ふ。  
射面して、梅子と云ふ。梅子と云ふ。梅子と云ふ。梅子と云ふ。  
うさぎ、梅子と云ふ。梅子と云ふ。梅子と云ふ。梅子と云ふ。  
をうさぎ、梅子と云ふ。梅子と云ふ。梅子と云ふ。梅子と云ふ。  
あつぬと云ふ。あつぬと云ふ。あつぬと云ふ。あつぬと云ふ。

國姓を明けたる平記四之巻終

